

【実践報告6】愛知県立新城有教館高等学校

1 はじめに

愛知県立新城有教館高等学校は、職業科の新城高等学校と、普通科の新城東高等学校が平成31年に統合し、新たに総合学科の学校として開校した。入学時より普通科の系譜を継ぐ「文理系」と、職業科の系譜を継ぐ「専門系」の二つの系に分かれていることが特徴である。入学後は各自の選択により更に七つの系列に分かれるため、教科・科目の数も多く、教える側の教員もさまざまな専門性をもっている。令和4年4月現在では各学年6クラス、全校生徒631名が在籍している。

新城市内唯一の高校として、地域からの期待も大きい。本研究が新しい学校としての教育目標を創り上げ、地域と共に生徒を育てていく契機となればという思いで、実践を進めていった。

2 実践

(1) グランドデザインの策定・周知と教育目標の共有

策定に当たっては全職員を4人ずつのグループに分け、本校及び本校生徒のもつ強みと弱みについて意見を出し合った。話し合った内容は、発表会を通じて共有した(資料1)。その後、代表者が集まって研究班を結成し、実際にグランドデザインに載せる文言や、デザインを決めていった。

グランドデザインの作成を行った令和2年度は、学校統合前の新城高校最後の生徒が、新城有教館高校の生徒と同じ校舎で学んでいたときであった。農業科や商業科、家庭科が今まで実践してきた学びについて、また大切にしてきたことを新城高校の職員から直接聞くことができ、新城有教館高校の職員にとって大変有意義な時間となった。

新城有教館高校の強みについては、総合学科ならではの「多様性・選ぶ活動の多さ」、そのために整えられた「環境・施設・設備」、そして「教師の専門性も多様」であることなどが挙げられた。反対に弱みとしては、当時は開校当初であったため学校全体としての方針が定まっておらず、「職員間の共有不足・足並みが揃わない」こと、「系列や科目選択などにかかる時間が短い」こと、「文理系・専門系に共通の指導の徹底がしづらい」ことなどが課題となっていた。

生徒については、「人柄がよい」「部活動や行事で頑張れる生徒が多い」「文理・専門の壁がない」といった声が多数挙がった。その反面、「主体性・積極性に欠ける」「競争意識が低い」という実態も浮かび上がってきた。また、「地元に残りたい生徒が少ない」という地域の課題も見えてきた。新城市は年々子どもの数が減ってきている。若い世代にこれからの新城を盛り上げていてもらいたい、という地域の方々の強い思いに答えるために、学校が果たすべき役割についても話が及んだ。

これらの強みを活かし弱みの部分を補うために、育てたい生徒像を「課題意識をもち、常に自分自身を更新できる生徒」「自分の可能性を信じ、努力を続ける生徒」「故郷を愛し、地域で活躍できる生徒」の三つに設定した。そして身に付けさせたい資質・能力は、「主体性」を核として「気づく力」「向き合う力」「伝える力」の三つとした。大人にも子どもに覚えてもらいやすくなるよう、短い言葉で分かりやすく表現することを最も意識した。

【資料1 職員による協議】



グランドデザインは、新城の山桜をモチーフにした明るいデザインに仕上げた(資料2)。多様な生徒を一つ一つの「花」に見立て、その「花」を育てる学校や教員を「土」、保護者や地域の思いを「太陽の光」として表現してある。新城市の小・中・高校共通で育てたい資質として挙げた「主体性」を「花」の中央に掲げた。

このグランドデザインを周知するために、校内での掲示や学校通信への掲載を行い、またホームルームの時間等を利用して生徒向けに説明を加えた。更に工夫したこととして、本校のホームページにつながる二次元バーコードを入れた。グランドデザインに込めた思いや、そもそもグランドデザインとは何かということについても知ってもらえるようなページとなっている。

(2) 目標に基づくカリキュラム・マネジメント

各授業において、一単元や一時間の中で身に付けさせたい資質・能力を設定し、その力を伸ばす活動を考えた。学習指導案の中にその能力や活動を書き入れ、力を伸ばすための手だてとして有効であったかを、研究授業等を通して確かめ合った。さらに、公開授業等の際に使用する講評用紙にも、カリキュラム・マネジメントの要素を取り入れた。以下、授業実践及び講評用紙について紹介する。

ア 2年生国語科・現代文Bの授業(資料3)

夏目漱石の小説「こころ」を教材として、登場人物の心情や作品の主題などについてグループ活動及び意見発表会を行った。この活動を通じて、自身の考えを「伝える」力を養い、また他のグループの意見を聞いて新たな視点に「気づく」ことをねらいとした。さらにはその過程を繰り返すことにより、作品自体、ひいては人間の心というものに「向き合う」ようになることも目標として、授業を行った。

イ 3年生商業科・地域と観光の授業(資料4)

単元全体を通して、育てたい生徒像の一つである、「故郷を愛し、地域で活躍できる生徒」を意識した。内容としては、生徒たちでルールを決め、地元を舞台とした魅力的な旅行プランを作成するというものである。この授業を通して、生徒同士がさまざまな問題と「向き合い」、活発に意見交換をする中で故郷の新たな魅力に「気づき」、広くそして分かりやすく「伝える」という、三つの力を意識した取組をすることができていた。

【資料2 グランドデザイン】



【資料3 国語科授業案】

<p>● 学習活動</p> <p>・ 本時は、本時の学習目標を達成し、教科書を読み、話し合いを行い、発表を行う。</p> <p>・ 本時は、本時の学習目標を達成し、教科書を読み、話し合いを行い、発表を行う。</p>	<p>● 学習活動</p> <p>・ 本時は、本時の学習目標を達成し、教科書を読み、話し合いを行い、発表を行う。</p> <p>・ 本時は、本時の学習目標を達成し、教科書を読み、話し合いを行い、発表を行う。</p>
---	---

【資料4 商業科授業案】

<p>学習活動</p> <p>10分</p> <p>・ 旅行プランにおける旅先の選定及び発表</p> <p>気づく力</p>	<p>・ 各自で考えた複数の候補地から選定を行う。</p> <p>・ 全体に向けて候補地の発表を行う。</p>	<p>・ 各自で考えた複数の候補地から選定を行う。</p> <p>・ 旅行プラン作成のルールを参考に、魅力を広く伝えたい候補地を選択させる。</p> <p>・ 旅行プラン作成のルールと条件が合致しない候補地を選択させない。</p> <p>・ 自分だけの着眼点を大切に、魅力を伝えられそうな候補地を選択させる。</p> <p>・ 候補地を伝えるだけでなく、現在考えられる伝えたい魅力も発表させる。</p> <p>・ 候補地が重なった場合でも問題ないことを事前に示し、自信を持って発表をさせる。</p>
<p>まとめ</p> <p>5分</p>	<p>・ 本時のまとめ</p>	<p>・ マイクロツウリズムの旅行プランを考えることで、故郷の魅力に気づき、伝える能力を身に付けていくことを確認させる。</p>

ウ 授業講評用紙のリニューアル

ビジネスの現場で用いられている「KPT法」という手法で用紙をリニューアルした（資料5）。「KPT」の本来の意味と、講評用紙における役割は以下のとおりである。

- ① 「K」…「Keep」／継続していくべきよいところを授業者に伝える欄
- ② 「P」…「Problem」／授業を通して見えた課題を書く欄
- ③ 「T」…「Try」／改善策や別の授業展開を提案する欄
- ④ 「+」…生徒の様子・姿を自由に書き込む欄 ※本来はないオリジナルの項目

「授業を批評する」というスタンスではなく、「教育目標を実現するため、考えられる授業展開を提案し合う」きっかけとなればという思いの下、このように作成した。従来の講評用紙は「Problem」や「Try」の要素が大部分を占めていたが、「Keep」を加えたことにより、お互いのよさも伝え合うことができると期待する。また、評価の視点として、身に付けさせたい三つの資質・能力を表の下部に書き加えた。観察者は、この三つの力を育てることを意識して、授業者に提案をすることになる。今後は生徒同士の評価シートとしても活用することを考えている。

【資料5 授業講評用紙】

授業見学・講評シート KPT+		記入者（ ）	
年 月 日	曜日	履 科 目 名（ ）	
学年・クラス/選択科（ ）		授業者（ ）	
Keep	一継続して行ってほしい ／真似したい 良いところ	Problem	一今日見えた課題 気になったところ
+生徒の様子で気が付いたこと		Try	一今後挑戦してほしいこと 別の授業展開の提案
◎生徒の「気づく力」・「向き合う力」・「伝える力」を伸ばす手立て いいアイデアがあれば「Try」に記入を！			

(3) 地域と目標を共有し、連携・協働した実践

ア スクールポリシーとグランドデザインとの関連付け

本校においても、中学生やその保護者に向けて、入学を期待する生徒像や本校における学びを明示したスクールポリシーを作成した。その中の「目指す生徒像」をまとめる過程で、グランドデザインの言葉と照らし合わせながら作っていった。下線が「育てたい生徒像」、太字が「身に付けさせたい資質・能力」と対応する部分である。

- ① 幅広い視野と豊かな心を持ち、自分や他者のために**気づき**行動することができる力
- ② 自身の可能性や課題と**向き合い**、目標達成のために**努力し続ける**ことができる力
- ③ 故郷を愛し、伝統を受け継ぎ、地域の魅力を**伝えて**いくことができる力

スクールポリシーは生徒や保護者が目にする確率が高いので、本校の教育目標をより多くの地域の方々に知っていただく機会となる。また「目指す生徒像」が多岐にわたるよりも、まずはグランドデザイン策定の過程でまとめたものに教職員全体で向かっていきたい、という思いもこめて、このようにした。

イ 「産業社会と人間」及び「総合的な探究の時間」での取組

本校は総合学科であるため、1年生で全員「産業社会と人間」を履修している。その中で、地元の方に取材を行った内容を基に、地域の魅力を発信する新聞づくりを行っている（次ページ資料6）。また2年生の「総合的な探究の時間」では、地元の食材を活かしたお弁当メニューの考案を行った（次ページ資料7）。どちらも自分たちが住んでいる、または通学している地域のことをより深く知る機会であり、故郷を大切に作る姿勢につながるのではないかと考えられる。

これらの活動は、文理系と専門系を混ぜたグループにすることで、互いのよさを知り、生かし合うということもねらいとしている。グループ活動や全体発表の機会を多数設けることで、「伝える力」を伸ばしていく生徒の姿が見られた。

【資料6 1年生の作成した新聞】



【資料7 2年生の考案したお弁当メニュー】



3 実践の成果と課題

(1) 実践の成果

校内で教員同士が話すきっかけとなったことが、最も大きな成果であると考え。学校統合という大きな流れの中で、普通科の流れを汲む「文理系」と職業科の流れを汲む「専門系」のそれぞれが大切にしていること、今私たちが接しているのはどういう生徒たちか、その生徒たちにどう育ってほしいか、といったことを改めて言葉で共有することができた。

また、「生徒の活動」と「授業の評価」の見直しにつながった。育てたい力を明確にしたことで、その力の定着を意識した授業内容を考え、活動を設定し、評価につなげることができた。この実践を続けていくことで、適切な教育目標の設定及び実現につながるであろうと考えられる。

(2) 見えてきた課題

今後の課題として、学校全体の取組にしていくことが必要であると考え。本校のように教職員の数が多く、教科の種類も多い学校では、取組の趣旨を全員が理解し、更に実践していくことは容易ではない。他の校務もある中で、カリキュラム・マネジメントを推し進めていくことへの理解・協力を得ることに難しさを感じられた。

また、地域と連携・協働した教育実践を充実させていくことも課題である。「産業社会と人間」の授業や、新城高校から継承されている専門科目等で既に地域とのつながり自体はもっているのに、今後はそれらを、学校教育目標を意識した活動にしていくことが必要であろう。

4 おわりに

今回の研究において取り組んだことや実践したことを、一部の教職員だけで終わらせない、また研究協力校であった3年限りの取組で終わらせないために、まずは校内の研究・研修体制を整えることが必要である。そして、今後教職員の入れ替わりがあっても引き継いでいけるような仕組みを整えていきたい。

カリキュラム・マネジメントを推し進めるに当たって、必ずしも新しく何かを始めることが必要なわけではない。まずは「自分たちの『強み』を生かして、『弱み』を補うためにはどうしたらよいか、知恵を出し合おう」というような切り口で話することから始め、少しずつ変化していくことができればよいのではないかと感じた。